

平和の色

沖縄県立那覇国際高等学校三年 運天 彩和

戦後八十年。戦争を語り継ぐため、私たちは何を語り、何を問い直さなければなら
ないのだろうか。語り継がれることのない記憶は、歴史の中に埋もれ、まるで存在し
なかったかのように消え去ってしまう。そんな危機感を留学先のアメリカで覚えた。
歴史の授業で、沖縄戦について「地上戦が行われた」とだけ説明があった。あまりに
もあっさりと語られたこの一言に、言いようのない違和感が胸の中で渦巻いた。沖縄
で生まれ育った私にとって沖縄戦は「ただの地上戦」ではなく住民を巻き込んだ壮絶
な体験と深い悲しみの記憶だ。たった一言では決して語り尽くすことのできない惨劇
が八十年前の沖縄で起こった。空から降り注ぐ砲撃は途切れることなく、赤い炎が木々
や家々を一瞬にして呑み込んだ。人々はガマで飢えと恐怖に耐えながら身を寄せ合い、
焼けただれた大地の上で多くの尊い命が失われた。生き地獄のような環境を必死に生
き延び、私たちへ命のバトンを繋いでくれた、おじいとおばあ。そして何も語らぬま
まに心に傷を負って生きる人たち。そうした人々の声が、今も沖縄には確かに残され
ていることを彼らに伝えたかった。私の話に静かに耳を傾けてくれたクラスメイトた
ち。彼らの多くは沖縄戦の存在を知らなかった。あれほどの惨上が、私たちの身近な
歴史である沖縄戦が知られていない現実を目の当たりにし、心が締めつけられるよう
な思いだった。

アメリカでは十二月七日が真珠湾攻撃の日として多くの人に認知されている。この
日、日本軍の奇襲攻撃によって二千人以上の命が失われた。彼らにとってこの日は、
戦争の痛みや犠牲を忘れないための追悼の日であり、深く心に刻まれている。しかし、
私はこの日が彼らにとってどんな意味を持つのか何も知らなかった。このとき、私自
身も無知であったことを痛感し、とても恥ずかしい思いをした。無知であるというこ
とは、他者の受けた苦しみを見過ごし、無意識のうちにその痛みを軽視してしまう危
険性を孕んでいる。私は沖縄の人々が受けた苦しみに心を寄せる一方で、他の立場か
ら見ても多くの人が同様に痛みを感じていたことに目を向けられていなかった。日本

にも他国の人々を深く傷つけた歴史がある。第二次世界大戦中、日本の占領下にあつ
た東南アジアの地域では、多くの人々が強制労働や非人道的な暴力によって命を落と
した。中でもシンガポール虐殺では、日本軍による民間人に対する無差別な虐殺が行
われた。日本軍は現地の民間人を突然拘束し、彼らは人としての尊厳すら踏みにじら
れ、無惨に命を奪われた。理不尽な理由で生きることさえ許されなかった人々の痛み
を、私たち日本人が忘れることがあってはならない。

それぞれの国には、視点に基づいた記憶がある。そして戦後八十年という時を経て
もなお、世界では争いが続いている。戦争の記憶を語り継ぐことは、過去の教訓を生
かすために不可欠だ。しかし、それだけでは各国の認識の違いは残り続ける。だから
こそ、私は平和のための歴史認識をそろえる努力が必要だと思う。そして今、その記
憶が語られ、受け取られた先で互いの経験や思いを共有し、歩み寄るという姿勢が次
の一步として求められているように感じる。

沖縄の「平和の礎」には、国籍を問わず全ての戦没者の名が刻まれている。アメリ
カ人の友人がそのことに深く感銘を受けた姿を見たとき、私は「平和を願う心に国境
はない」と感じた。だからこそ私たちは、多面的に戦争の記憶を見つめ、互いの歴史
認識を分かち合っていくべきだと思う。バックグラウンドが異なれば戦争への認識も
異なる。故に、それを国を越えて共有することは非常に繊細で難しい作業でもある。
それでも、各国の苦しみや犠牲に心を寄せ合い、対話を通して理解を深めていくこと。
その積み重ねこそが、過去の悲劇を繰り返さないための確かな土台となり、平和への
道となる。

私は日本人であり、ウチナーンチュでもある立場から、沖縄戦の悲しみを発信する
と同時に、日本が他国に与えた痛みにも向き合っていきたい。その歴史の両面性から
目を背けずに伝え、共有し、そして共に考えること。これが今を生きる私たちの役目だ。
沖縄戦は今も人々の心の傷となり、私たちに問いかけ続けている。決して歴史の一部
としてセピア色の写真のように風化させてはならない。国と国との記憶が「ぶつかり
合う」のではなく、「交わり合う」ことで平和という新しい色が生まれることを目指
して。